

# 大谷學報 第十九卷 第三號

## 現生十種益の研究

—現實生活の指導原理—

稻葉圓成

一

眞宗教義を現實生活の指導原理として説かねばならぬといふ要望が、かなり長い以前から叫ばれ、いろいろの研究や實踐が企てられて居る。しかしさういふ企てが、時代に追従する爲めのものであつてはならぬ。眞宗教義それ自身の中に現實生活の指導原理が内含されてあるか否かの根本問題を等閑に附してはならぬ。私のこの一小論文はこの根本問題に答へんとする一つの試みである。現生十種益の文は正に眞宗教義と現實生活との交渉を解明する重要な一資料である。

二

343

現生十種益の研究に關する限り、先輩の業績はあまりにも貧弱である。むしろ看過されたといつても過言ではある

現生十種益の研究

一

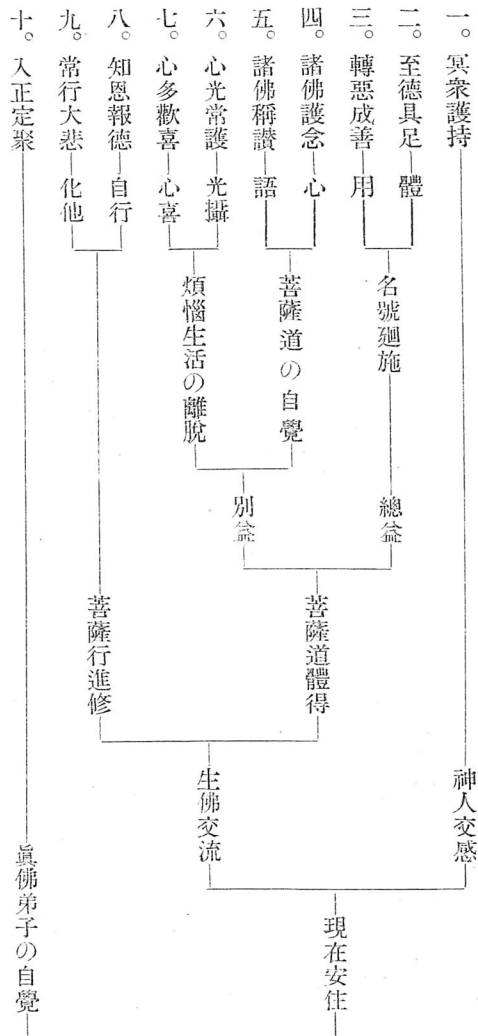
まい。先づ先輩の研究に私の承服し難いものに二つを挙げ得る。一はこの十益を附録的の傍益とすること。二には十益中に顯益密益を分け、冥衆護持、至徳具足、諸佛護念、諸佛稱讚、心光常護、等は密益とすること。この見解が宗祖の意に副はないことは、この十益が願成就文の即得往生住不退轉の文意を、宗祖の體驗によつて叙べたものであることに注意し、願成就文が信の一念の内容を開顯したものである、といふ宗祖の領解（一多文意<sup>三</sup>左参照）と照合せば附録的の傍益ではなく、信心の一念中に感得さるゝ正系の利益たること明かである。次にこの十益が既に信の一念に内感せられたるものであるならば、それを信者の意識に上らない密益とすることが祖意を得ないことは瞭然たるものがある。尤も顯益といふても信の一念の意識内容であるから、籠雜な感覺的認識でないことは勿論である。十益が顯益とする論據は、信卷末の次下<sup>六丁</sup>右に、眞佛弟子の釋が設けられ、そしてその下に大經の觸光柔軟の願文以下十九の引用文が列擧してある。そしてその引用文の悉くが現生十益を立證するものである。即ち眞佛弟子の釋はそのまま入正定益（十益の總結）をいふものである。然れば入正定聚益は眞佛弟子の自覺を持ち得た位に名くるものである。然れば眞佛弟子の自覺が現生十益によつての目醒めであることは明かである。さすれば、これを密益として片付くべきでないことはあまりにも明瞭である。

## 三

先づ十益の大綱を綜合すること左の如し。

十八、四十、左) 又信心のその體南無阿彌陀佛であり、その名號を稱揚嗜嗟するが諸佛の使命である(第十七願成就。小

するであらう。信心よるこぶその人は如來に等しきが故に、諸佛如來は信心の行者を護護したまふのである(末燈鈔  
 (1)に就いての鄙見は項を改めて叙ぶることにする。次に諸佛護讚は何を行者に與へるかを研究せば、(2)の疑問を解消  
 は云何。(彌陀の心光を前にし)諸佛の護讚を後にするのが當然の順序であるべきに、それを倒置してあるはなぜか。  
 (彌陀の)の前に案ぜられたるは何故か。(2)名號廻施を擧げて次に諸佛の護讚を出し、後に亦彌陀の心光常護益を叙べたの



現生十種益の研究

經和讚。末燈鈔十二參照）かく諸佛護讚は信心の行者が諸佛如來の徳を持ち、諸佛如來と同等の位に住することを目醒めしむるが諸佛護讚益である。即ち行者は如來徳の廻施によつて、始めて成佛道に参加し、やがて大涅槃を超證し得る便同彌勒の菩薩位に一步を踏み入れたといふ大自覺が打込まれたのである。然るにこの菩薩の行く手には、惡業煩惱の障礙が横つて居る。その障礙を除去せねば、折角踏み入れた菩薩道を進むことが出来ぬ。それが爲に心光常護が用意されてある。光明の照護は煩惱を斷除しないけれど、煩惱のあるがまゝを行者の前に照示し、煩惱を自覺することこれを契機に煩惱の跳梁が封ぜられて、他力の悲願を仰ぐ法悦に轉回する。此に於いて煩惱生活を自ら離脱することが出来る。これ不斷煩惱得涅槃の妙趣である。然れば「菩薩道の自覺」を内感する諸佛を先に、煩惱の障礙を除去する心光を後に案すべきである。かく用意された所に、信心の行人は、坦々たる菩薩道を進むことが出来、自行化他の菩薩行が進修される。然れば二―七の六益は、信心の行人が菩薩行を實踐する爲の資糧である。そこに菩薩道が體得されたのである。されば、信心の行人の實踐は第八・第九の二益に攝まる。即ち自利行としては知恩報徳の感恩生活が營まれ、化他行としては常行大悲の大悲傳普化の實踐である。而して自他の二行の實修さるゝ所に、正定聚の菩薩としての自覺が生れ来るから最後に入正定聚益で結んである。住正定聚は必至滅度に對するもので、往生成佛の確信が出来たことを顯す語である。

圖示中、生佛交流といふは、衆生貪瞋煩惱中に回施される得益であるから、かゝる得益によつて衆生の迷夢が無くなり、佛になり切つたのではなく、煩惱中に至徳を具足し、至徳の具足によつて、佛を手近く仰ぎ、佛を仰ぐことによつて、自己の衆生相をより明に痛感するといふやうに、衆生と佛とが、十益を得ることによつて、道交すること

顯すが、生佛交流の語である。佛と共に起居し、佛の指導によりて生活が導かれ、且つその改善され行く生活の上に、衆生の機功を泯じて、常に佛力絶對を仰信する宗教的生活が展開さるゝをいふのである。

#### 四

冥衆護持益を卷頭に掲ぐるは云何。これに就いて先輩の指示なく、又これを解決する資料を他に發見せず、暫く暗推を恣にして祖意を確めやう。先づ第一に宗祖が獲信に依つて最も強く胸に響いたものが、神々の護持であつたからそれを卷頭に掲げられたと暗推することは、恐らく誤りではなからう。若しさうだとするならば、獲信以前にありて對神祇に就いて大きな關心を持つて居られたことが想像される。然らば叡山御修學時代に於ける山門徒がいかに神祇を考へつゝあつたかといふに、平安朝の祈禱佛敎の立場から、神に祈り、神の意を喜ばしむることが、攘災祈福の要諦であるといふが山門一般の神に對する觀念であつた。それは山門のみならず、當時の一般民族信仰でもあつた。しかし、それは地上の吉凶禍福がすべて神の意思によつて支配さるゝといふ冥顯一致の思想を是認しての上に合理性を認め得るが、その冥顯一致の思想が破れ、吉凶禍福は、自然科學的に原因を、若くは佛敎學の立場から因縁果の道理によつて其原因をつきつめ、これが對策を施さねばならぬといふ、科學的態度に立つならば、冥顯一致思想は打ち壊され、従つて攘災祈福といふことも無意義になる。宗祖の叡山時代には、一面傳統的に込み込んで居る攘災祈福の考を捨てることが出来ないにも拘らず、それを理性的に批判して、それは不合理であり、因縁果の鐵則に順應して行くべきである。しかし實際の場合には、理性の批判を一蹴して、やはり災禍を攘ふ爲に私利私欲を滿たす爲に、神々に祈禱せずには居られない。理性と感情との争闘がどれだけ、眞劍な求道者を苦しめたことであらう。しかるに獲信の一念に

この矛盾が解決され天日を見るが如くに明朗となつた。それは「祈らずとも神や護らん」の神の發見であつた。即ち從來固執して居つた神は、祈り求むる者のみを守護したまふ神であり、祈り求めぬ者の上には、いかに心正しくとも顧み給はぬ神であつた。攘災祈福はこの神の觀念によつて行はれた。しかしそれは心賤しき人の心を以て神を律するもので、全く神の冒瀆であつた。しかもその冒瀆を崇敬として思ひ昂つて居つた。それが今は、神徳は月影の宿らぬ隈のなきが如くに、善惡正邪美醜の隔てなしに萬民を照護し給ふ。神意を歪曲して神徳を冒瀆して居た昔ながらに哀慙懨受を垂れ給ふ神なりしを、今方めてその照護に目ざめたのである。しかして、何にが神を歪曲し冒瀆させたかといへば、煩惱に眼遮えられたがためであつた。盲目の欲望が私を支配したからである。それが獲信によつて信心の智慧の眼が開け、煩惱の雲が晴れたからして、神の恵みをまともに仰ぎ得たのである。即ち是れ冥衆護持益の實感である。これに依つて至徳具足に先ちてこの益を掲げられたものであらう。そこに宗祖が神國日本の國民としての自覺が出來、よくこそ日本に生れたれの祖國愛の心持が仄見えるのである。尙圖に神人交感といふは、かく神の護持を内に發見する所に、神に頷き神恩を感謝したてまつる敬虔の情操が湧き、さういふ敬神の情操そのもの、上に更に神の護持を確め、更に神の御心のまゝに生活を進め、生活の中に神徳を實現することに努める。そこに神を人の中に、人が神の中に微妙な交錯が體驗され、生活そのものが神徳によりて莊嚴される。それを神人交感といつたものである。

## 五

入正定聚益は十益の總結である。この益を他の語で言ひ直したが、次下の眞佛弟子釋である。そのこと前述の如し。此釋は眞佛弟子者眞言對<sub>レ</sub>偽對<sub>レ</sub>假也弟子者釋迦諸佛之弟子。金剛心行人也。由<sub>二</sub>斯信行<sub>一</sub>必超<sub>二</sub>證大涅槃<sub>一</sub>故曰<sub>二</sub>眞佛弟

子」とある。即ち釋迦佛の眞弟子なりといふ自負自信である。無戒名字の比丘が、たゞ金剛心の行人たるが爲に、當來に大涅槃を超越して、釋迦佛の跡を逐ふことが出来る。何といふ不可思議であらう。宗祖が釋迦を憧憬したまふ念の厚きは、「釋迦彌陀は慈悲の父母」と讃せられしこと、御臨終に釋迦の涅槃相にあやかつて頭北面西右脇に伏したまへること、そして「念佛成佛これ眞宗」といふ念佛を成佛道なりとし、往生即成佛を力説せることも、眞佛弟子釋並便同彌勒の釋（信卷末）を参照せば釋迦佛に深い關心を持つて居られたことを顯すものである。この金剛心の行人が我こそ釋迦諸佛の眞弟子なりといふ矜恃を懐くといふことは、今の教團にありても、やゝもすれば閑却され易いことであるが、この現生十益より味はるゝ宗祖の信仰内容に重要な位置を占めて居ることを注意すべきである。

## 六

以上、粗雑ながら現生十益に就いての私見の概要を叙し了つた。これによつて指示されることは、眞宗の他方信心が現實生活の規範なり指導原理なりを顯示して居ること。而してその歸結は煩惱生活を離脱して感恩生活を樹立すること。そこに眞佛弟子の矜恃を持ち而も日本國民の自覺を堅持する、榮えある現實生活の展開することを叙べられて居る。